



「見たり、聞いたり、探ったり」 No.285

通算 No.436

青木行雄

「明治神宮」

令和5年「秋の大祭」に参加して

令和5年11月3日（文化の日）

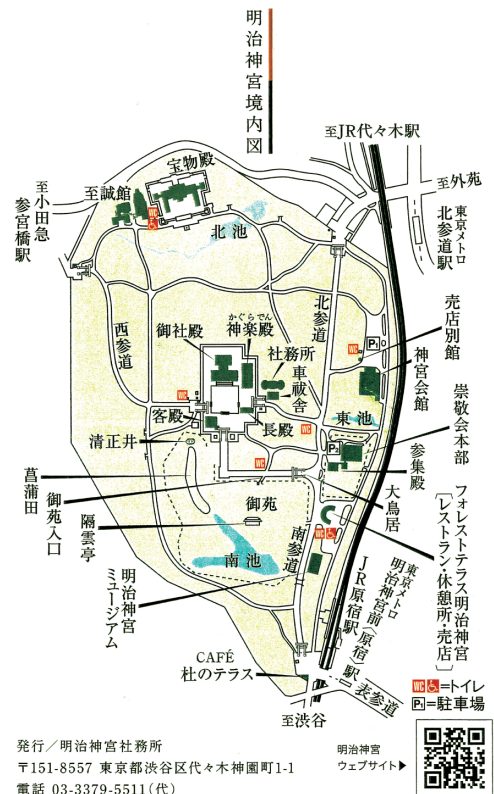
御祭神の明治天皇は1852年（嘉永5）11月3日、京都で御誕生になられた。明治神宮ではこの日を例祭日（祭神または神社に由緒ある最も大事な祭典日）と定め、1920年（大正9）11月1日にここ代々木の地に「鎮座」以来、毎年勅使（天皇陛下の使者）の参向を仰ぎ、祭典が厳かにとり行われてる。

勅使は、天皇陛下により御幣物を納めた唐櫃を奉って参進し、御神前にお供えした後に御祭文を奉る。

こうして勅使が参向してお祭りが行われる神社は、全国に八万社あると言われる神社の中でも16社（勅祭社とも呼ばれる）しかなく、特に皇室と関わりの深い神社と言える。

現在、11月3日を「文化の日」と称しているが、敗戦後の1948年（昭和23）に改称されるまでは「明治節」として全国の小学校や各団体等で明治天皇の御聖徳を顕彰する記念式典が行われていた。

日本の祝日の本来の意義を思い起こし、わが国の伝統と文化を守る心を伝えていく上で大事な行事だと身のひきしま



明治神宮境内地図



秋の大祭のキャン



秋の大祭に勅使が御幣物を参進する様子



秋の大祭に御招待の外国人要人の乗用車



明治神宮本殿前の人波



祭典に参加する受付場所。後方に一般参拝者が多く見える



大祭に参列する参加者の皆様。神殿に向かって両側に着席する参拝者

る思いで参列した。

「明治節」歌詞の文句を読んで見ると大変な歴史を感じる。この詞の一字々々が日本の心髄^{しんずい}かも知れないと思う。

明治節 作詞 堀澤周安 作曲 杉江 秀

一、垂細垂の東 日出づる處
 聖の君の 現れまして
 古き天地 とざせる霧を
 大御光に 隈なくはらひ
 教あまねく 道明らけく
 治めたまへる 御代尊

二、恵の波は 八洲に餘り
 御稜威の風は 海原越えて
 神の依させる 御業を弘め
 民の榮行く 力を展ばし
 外つ國國の 史にも著く
 留めたまへる 御名畏

三、秋の空すみ 菊の香高き
 今日よき日を 皆ことほぎて
 定めましける 御憲を崇め
 諭しましける 詔勅を守り
 代代木の森の 代代長へに
 仰ぎまつらん 大帝

又場内ではいろいろな行事が行われ、多勢の人々がそれぞれ参加や見物でにぎわっていた。

祭典式次第	
一、	宮司一拝
一、	開扉
一、	献饌
一、	本庁幣を奉る
一、	祝詞奏上
一、	勅使御幣物を奉じて参進
一、	御幣物を奉る
一、	御祭文奏上
一、	勅使玉串拝礼
一、	勅使退下
一、	神楽「代々木の舞」奉奏
一、	頌歌「明治節」奉唱
一、	玉串拝礼
一、	御幣物を撤す
一、	本庁幣を撤す
一、	撤饌
一、	閉扉
一、	宮司一拝

明治神宮「秋の大祭」令和5年11月3日、祭典式次第



大祭での九條宮司の挨拶風景



秋の大祭で「舞楽」(ぶがく)を奉納する舞

①舞楽(ぶがく)

「振鉦(えんぶ)」

舞楽会(ぶがくえ)の最初に舞われる曲である。天地の神々と先霊を祀る意味があるとされている。左右の舞人が一人ずつ、笛・太鼓及び鉦鼓(しょうこ)だけの伴奏で舞う、周の武王が天下の平定を誓った光景といわれている。

「春庭花」(しゅんでいか) (左方^{さほう}の舞)

唐の玄宗皇帝(在位712～756)が、春に花が咲くのが遅いことを憂い、楼上で一曲を奏すると、庭に百花が咲き乱れたので、この曲を「春庭花」というようになったとの伝えがある。

桓武天皇(在位781～806)の御代に遣唐舞生の久礼真蔵(くれのまくら)が伝えられている。

この曲は一帖と二帖に分かれ、一帖だけ舞う時は「春庭楽」(しゅんでいらく)と呼び、二帖とも舞う時は「春庭花」と呼ばれている。

左方の四人舞で、舞人は蛮絵装束(ばんえしょうぞく)の右肩をぬぎ、卷纓(けんえい)の冠に挿頭花(かざし)を付け、太刀を佩き舞う。後半、舞いながら舞台を回る姿は、あたかも花が開いたり閉じたりする様を思わせてまことに優麗な舞である。



当日「合気道」の現場風景



明治神宮内「流鏝馬」の風景



明治神宮式典での神楽「代々木の舞」の舞女



明治神宮、境内の森風景

「仁和楽」(にんならく) (右方うほうの舞)

光孝天皇の仁和年間(885～889)に勅命によって百済の貞雄が作り、年号をとって曲名にしたといわれている。

高麗いちこつちやう壺越調の四人舞で、舞人は鳥甲とりかぶとをかぶり、襲装束かさねしやうぞくをつけ、右肩を袒いで舞います。

まず「意調子」(音頭おんずの一種で短い前奏曲)が奏され、続いて「当曲」が奏されると、舞人が順次舞台に登って「出手でうて」を舞い、舞座の揃ったところで当曲の舞となる。

「長慶子」(ちやうげいし)

醍醐天皇の孫・源博雅みなもとのひろまさの作といわれている名曲で、慶祝の意を表し、慣例として舞楽会の結びに奏される。曲だけで舞はない。

※大陸系の「舞楽」は左方さほうの舞(中国系)と右方の舞(朝鮮系)に大別される。

大祭りでおこなわれた「舞楽」について説明したが、この外、「能・狂言」、「三曲」、「邦楽邦舞」(ほうかくほうぶ)、「全国弓道」、「古武道」、「合気道演武」、「百々手式」、「薩摩琵琶」、「菊花展」等々、多彩な行事が行なわれて大変な人出であった。

その中で特に「流鏝馬」(やぶさめ)があった。(西参道沿芝地)

この流鏝馬の起源は、欽明天皇が宇佐神宮の神前で天下泰平、五穀豊穰を祈願し、馬上から三つ的を射させられた矢馳馬神事にさかのぼるといふ。

明治神宮では、1920年(大正9)、鎮座奉祝流鏝馬が武徳会より奉納され、1932年(昭和7)以降は全日本弓馬会より毎年奉納されている。1945年(昭和20)に一度中断されたが、1953年(昭和28)に復活し、今日に至っているという。

この起源とされる「流鏝馬」の発生地、大分県の宇佐神宮は全国4万社あるといわれる八幡神社の総本宮として、第15代応神天皇の御神霊をはじめ「比売大神」及び「神功皇后」を合せ奉祀する、勅祭の大社である。

ちょっと横道にそれるが、この「宇佐神宮」と関係が深いので記して見る。

今から1300年前、725年(神亀2)現在の大分県宇佐市亀山の地に一之御殿が鎮座したことに始まり、以後、八幡三所として、御皇室を始め、広く一般国民に尊崇されて来た。

2025年(令和7)に、この宇佐神宮は目出度く御鎮座1300年の佳節を迎えるという。

その2025年(令和7)に十年に一度の奉幣(勅祭)が古義に則り麗しく斎行される。

そして、起源である「流鏝馬」も花々しく斎行されるが、毎年8月1日には実行されている。

秋の大祭、この日明治神宮の社は晴天にめぐまれ、世界の観光客も多数参加し、式典には各外国の大使館大使も招待され、外国ムードも漂っていた。

コロナ禍で観光客も大幅に減少したが、この日はマスク姿も少なく晴天でもあり、文化の日にふさわしい、祭典日であった。



大分県宇佐神宮本殿



宇佐神宮「流鏝馬」(やぶさめ) 神事風景

記 令和5年11月26日

参考資料

明治神宮秋の大祭パンフ

宇佐神宮記念事業パンフ